

していのちの大切さを知った、⑧小さなころに与えられなかったものをどうしたら取り戻せるかが見えてきた、などの感想が出た。

合宿全体の感想としては、①考えすぎずに感じることに触れることが受容することがシンプルだが大切なことだと思った、②他の親子関係から多くのことが学べた、③子どもが安心して自分から離れて遊んでくれた、④乱れたら呼吸に戻ればよいと思えた、⑤毎日少しずつでも子どもに向かい合う時間を取ろうと思った、⑥自分を信じようと思えるようになったことなどが語られた。

支援者としての自分自身が心がけたことは、①相手の様子から察せられることでもすぐに指摘するのではなく周囲との交流の中で自然に気づけるような流れを促進すること、②理論的な説明はタイミングを見て簡潔にすること、③子供のとのやり取りの中でモデルを示しながら一緒に考えること、④一人ひとりの語りに共感し傾聴することなどであった。

医療・福祉現場における

〈ヘビハラ僧〉の現代的役割について

打本 弘 祐

筆者は福祉現場及び緩和ケアを主体とした医療現場でのビハラ僧の経験を持つ。当発表では、実践者としての立場から改

めてビハラ僧の現代的な役割の考察を試みたい。(ビハラ僧には数々の呼び方がある為、以下〈ヘビハラ僧〉と括弧)ビハラ萌芽期では田宮仁氏の説く仏教者屑籠論が提唱され、終末期医療の場においては〈ヘビハラ僧〉があたかも屑籠のようになつて患者の心の問題が放り込まれることが期待されていた。また梯実圓氏は「布教伝道ではなく、病床で寄り添う不請の友」であることを提唱されていた。二人とも大きな意味での〈ヘビハラ僧〉像を描いていたといえる。しかし、具体的な〈ヘビハラ僧〉の役割を定めていたとはいえず、しかも現在に至るまで同じ状態であると考えられる。ビハラ萌芽期に比べ現代では〈ヘビハラ僧〉を巡る背景には大きな変化が訪れており、それらに沿って〈ヘビハラ僧〉にも明確な役割が必要であると筆者は提唱したい。

一つ目の変化は一九九九年のWHOによる健康定義改正論議を発端として、医療分野全般に「スピリチュアル／スピリチュアリティ／スピリチュアルケア」への関心が高まったことである。これに伴って日本でもそれらに関する研究が盛んになっている訳だが、とりわけ日本の全てのホスピス・緩和ケア病棟を対象にスピリチュアルケア提供者についての調査を行った菊井他「二〇〇六」では、スピリチュアルケアの提供者として宗教家の関与に焦点が当てられている。ホスピス・緩和ケア病棟へ送った質問用紙の中に「チームへの宗教家の参加の必要性について」という質問項目がある。そこでは九七・六%もの緩和ケア病棟からなんらかの形で宗教家の関与が必要であるという肯定的意見が明らかにされており、スピリチュアルケア提供者と

しての「ヘビハラ僧」像が求められていると考えられる。

二つ目の変化はビハラという概念自体がビハラ萌芽期より拡大してきているという点である。谷山「二〇〇五」によれば、現在ビハラは三つの枠組み、すなわち「狭義」：仏教を基礎としたターミナルケア活動及びその施設、「広義」：老病死を対象とした、医療及び社会福祉領域での、仏教者による活動及びその施設、「最広義」：災害援助、青少年育成、文化事業など「いのち」を支える、または「いのち」についての思索の機会を提供する、仏教者を主体とした社会活動というように三つに拡大して捉えられている。これらに伴いビハラ萌芽期よりも「ヘビハラ僧」像も拡大して考える必要性がある。今発表では谷山「二〇〇五」の「狭義」と「広義」を踏まえた「ヘビハラ僧」像の試論を述べた。すなわち筆者が想定するのは、医療現場だけでなく、福祉施設現場も視野にいた「狭義」及び「広義」の範囲でも活動する「ヘビハラ僧」像である。

医療・福祉現場における現代的な「ヘビハラ僧」の役割として『チャプレン白書』に記される十項目の役割を参考に、筆者自身が医療・福祉現場で「ヘビハラ僧」の経験を積みながら思考していたことと加味して、以下の四つの役割が「ヘビハラ僧」には必要であると考えられる。①基本的な姿勢、②宗教家としての役割、③スピリチュアルケア提供者としての役割、④医療・福祉におけるケアチームスタッフとしての役割の以上四点である。

ビハラ萌芽期には、「ヘビハラ僧」の役割は明確に定まっていた訳ではなかった。しかし、現代においては、上述したよ

うに医療界からのスピリチュアルケア提供者として求められる宗教家像や、ビハラ活動の福祉への拡大化という背景を踏まえて、以上の四点のようにある程度具体化させた上で、「ヘビハラ僧」自身が役割を認識して活動する必要があることを提唱した。

現代の「お迎え」現象と聖衆来迎

——仏を迎えるトレーニング——

大村 哲 夫

死に瀕した人は、他者には見えないさまざまなイメージを見ることが知られている。二〇〇三年から二〇〇七年に自宅等で死亡した六八二人の遺族対象の質問紙調査（東北在宅ホスピス研究会二〇〇七）によると、「他人には見えない人の存在や風景について語った」患者は全体の四二・三％にのぼる。このような現象は一般に「お迎え」として知られるものであるが、宗教や民俗学の領域でこれまであまり研究の対象とされてはこず、臨死体験や臨床心理学の分野でその存在が指摘されてきたに過ぎない。

「お迎え」の語は歴史的に「御来迎」とほぼ同義に用いられ、阿弥陀仏が諸菩薩と共に念仏行者の臨終に出迎え極楽世界へ連れて行くことを指し、古代以来編まれてきた「往生伝」等にはその「実例」が枚挙に暇がない。しかし前述した現代の「お迎